
分娩前後における母性形成支援の取り組み

—カンガルーケアと2冊の本の効果—

福永寿則 松下厚子 小野川エツ子 奈路理佳

周産期医学 第35巻 第7号 別刷

(2005年7月)

東京医学社

〒113-0033 東京都文京区本郷3-35-4
電話 03(3811)4119(代表)

分娩前後における母性形成支援の取り組み

—カンガルーケアと2冊の本の効果—

福永寿則 松下厚子 小野川エツ子 奈路理佳

はじめに

生まれた「ヒト」が「人」として健やかに育つということは、また、幸せな人生を歩める基礎となるのは、他者との温かい愛のある交流ができる心が育つことである。そのためには豊かな母子相互作用、確かな母と子の絆が重要となる¹⁾。

ヒトの場合、子どもが親に対して抱く愛着の確立には長い時間を要し、1～2年といわれている²⁾。一方、母親にとっての我が子に対する愛着形成の臨界期は、他の哺乳動物と同様に比較的限られた時間であるといわれており、「出産直後の1週間」が考えられている³⁾。

今回、分娩前後における母性と、母乳育児の確立その他1カ月健診までの育児についての基礎的検討を行った。その後、豊かな母性形成支援を目的として、分娩直後のカンガルーケアや2冊の本使用などの取り組みを行い、その効果について検討した。

I. 分娩前後における母性の基礎的検討

1. 対象と方法

対象は1996年6月21日～1998年1月20日くぼかわ病院での分娩233例中、早産、帝王切開分娩、低出生体重児、apgar score 6点以下、双胎、新生児搬送、および精神疾患などの母体合併症例を除いた正常分娩178例。この期間はくぼかわ病院産婦人科の取り組み第1期にあたり、分娩直後からの24時間母子同室・頻回授乳、糖水・人工乳追加基準の採用、母親の精神的サポートを行っている⁴⁾。

妊娠36週の妊婦、産後退院前(産褥5～7日)および1カ月健診時の褥婦に、質問紙を渡し記入してもらった(表)。母乳率についてはカルテから

調査した。質問紙回収数は妊娠36週136(77.0%)、退院前114(64.0%)、1カ月健診時151(84.8%)であった。

有意差検定はカイ二乗検定により、 $p < 0.05$ を有意水準とした。

2. 結果

1) 児に対する強い愛情を感じた時期と1カ月健診までの育児に対する感想

児に対する強い愛情を感じた時期に関する産後退院前の質問(表：質問4)では、「妊娠中」が12.3%、「出産後分娩室で」46.5%、「帰室後24時間以内」23.7%、「24時間以降入院中」17.5%であった。

1カ月健診までの育児に対する感想(I)では「順調であった」が35.3%、「大変だったが充実していた」42.7%、「まあまあ」15.3%、「大変でつらかった」6.7%であった(表：質問7)。

質問4で「妊娠中」と答えた人の92.9%、「出産後分娩室で」と答えた人の83.7%が、質問7で「順調であった」あるいは「大変だったが充実していた」と肯定的にとらえており、帰室以降の群の62.2%に比べ有意に多かった($p < 0.05$)。

2) 児に対する強い愛情を感じた時期と1カ月健診時の対児感情

1カ月健診までの育児に対する感想(II：複数回答可)では、「赤ちゃんをあずけて、ゆっくり休みたいと思うこともあった」45.7%、「赤ちゃんが眠ってくれるとやれやれと思う」62.3%、「赤ちゃんの寝顔を見ているとうれしくなってくる」81.5%、「赤ちゃんは可愛く、育児は楽しかった」53.0%であった(表：質問8)。

このうち「赤ちゃんは可愛く、育児は楽しかった」を選んだ人は、質問4で「妊娠中」と答えた人の

表 妊娠36週、退院前、1カ月健診時質問

〔妊娠36週質問〕

質問1. 赤ちゃんのことをよく考えますか
(胎動を感じる以外に)
○よく考える ○時々考える ○あまり考えない

質問2. 授乳について

○ぜひ母乳で育てたい ○できれば母乳で育てたい
○どちらでもよい ○ミルクでよい
○特に考えていない

質問3. なぜ母乳哺育が良いと思いますか

(いくつでもお選び下さい)

○母と子のスキンシップ ○免疫が得られる
○母の産後の回復を促進する ○栄養面から
○楽だから ○無料だから ○その他

〔退院前質問〕

質問4. 子どもを本当に可愛いと思ひ、愛情を感じたのはいつですか

○妊娠中 ○出産後分娩室で ○帰室後24時間以内
○24時間以降入院中 ○まだ感じていない ○その他

質問5. 母児同室の良かったことはどんなことですか

(いくつでもお選び下さい)

○赤ちゃんが一緒に安心してきた
○赤ちゃんが可愛く、一日が楽しかった
○母乳を十分与えることができた
○十分に赤ちゃんの世話ができて満足
○退院時には育児に自信が持てた
○家族がいつも面会できて良かった ○その他

質問6. 母児同室の良くなかったことは

どんなことですか (いくつでもお選び下さい)

○寝不足になった ○再三泣いて困った
○入院中くらいはゆっくり休みたかった
○赤ちゃんがいるため不安だった ○疲労が強かった
○世話の仕方が分からなかった ○その他 ○無

〔1カ月健診時質問〕

質問7. 1カ月健診までの育児に対する感想(I): ひとつのみ

○育児は順調であった
○育児は大変だったが、充実していた ○まあまあ
○育児は大変でつらかった

質問8. 1カ月健診までの育児に関する感想(II): いくつでも

○赤ちゃんをあずけて、ゆつくり休みたいと思ふこともあった
○赤ちゃんが眠ってくれるとやれやれと思う
○赤ちゃんの寝顔を見ているとうれしくなってくる
○赤ちゃんは可愛く、育児は楽しかった

78.6%、「出産後分娩室で」の58.0%であり、帰室以降の群の27.7%に比べ有意に多かった($p < 0.01$)。

3) 妊娠36週母性意識と1カ月健診時授乳状況

妊娠36週で「赤ちゃんのことをよく考えますか?」に対し、「よく考える」と答えた人は59.0%、

「時々考える」39.6%、「あまり考えない」1.5%であった(表: 質問1)。

1カ月健診時に人工乳のみになっていた人は「よく考える」群では0名であったのに対し、「時々考える」群では4名(7.7%)、「あまり考えない」群では1名(50%)であり、有意差がみられた($p < 0.01$)。

4) 妊娠36週母乳育児希望状況と1カ月健診時授乳状況

妊娠36週授乳についての希望では、「ぜひ母乳で」46.3%、「できれば母乳で」41.2%、「どちらでもよい」11.0%、「ミルクでよい」0%、「特に考えていない」1.5%であった(表: 質問2)。

1カ月健診時母乳率は、「ぜひ母乳で」の群が72.6%、「できれば母乳で」の群が52.7%、その他の群が47.1%と、有意差がみられた($p < 0.05$)。

5) 妊娠36週母乳育児に関する知識と1カ月健診時授乳状況

妊娠36週の時点で7項目を示し、母乳育児の長所と思うものをいくつでも選んでもらった(表: 質問3)。長所として選んだ数が2個以上の群では1カ月健診時母乳率が66.3%と、1個以下の群の46.2%に比べ有意に高かった($p < 0.05$)。

6) 妊娠36週、母乳育児に関する知識と母乳育児希望状況

質問3で長所として選んだ数が2個以上の群では、質問2で「ぜひ母乳で」と答えた人が51.6%と、1個以下の群の35.0%に比べ高い傾向にあった($p < 0.1$)。

3. 基礎的検討のまとめ

出産した児に対する愛情を早く感じた母親ほど、1カ月健診までの育児を「順調」などと肯定的にとらえ、児に対する愛情も豊かなことが分かった。妊娠中に児のことをよく考えた母親ほど1カ月健診までに人工乳を足すことが少なく、また、母乳育児についての知識を多く持っているほど母乳育児を希望する傾向があり、1カ月健診時の母乳育児の確立がよいことがわかった。

II. 母性形成支援の検討

1. 対象と方法

対象は次の3群。A群(1996年6月~1998年1

月分娩正常例 178)：基礎的検討の対象と同じ。B群(1999年分娩正常例 151)：母性愛・母親自覚の早期確立を目的に、分娩直後のカンガルーケアを開始。また、分娩室からの帰室時も母子同床とし、退院時お土産の人工乳・哺乳びん廃止、退院後1週間目の児健診(体重測定)開始。C群(2000年1月～2001年5月分娩正常例 248)：母性意識(母親自覚と母性理念)形成促進、母乳育児についての正しい知識獲得を目的に、妊娠4カ月で2冊の本「母乳育児何でもQ&A」⁵⁾「抱かれる子どもはよい子に育つ」⁶⁾購入の薦めを開始⁴⁾。対象中実際に2冊の本を購入したのは230名(92.7%)。

方法は、退院前および1カ月健診時に質問紙法により調査。また、カルテから産後母親の希望により児を新生児室に預かった回数、退院時および1カ月健診時母乳率を調べた。質問紙の回収数は退院前がA群114(64.0%)、B群128(84.8%)、C群217(87.5%)、1カ月健診時がA群151(84.8%)、B群133(88.1%)、C群236(95.2%)であった。

2. 結果

1) 児に対する愛情の早期確立

児に対する強い愛情を感じた時期に関する産後退院前の質問4に対し、B群は「妊娠中」17.2%、「出産後分娩室で」50.0%、「帰室後24時間以内」14.1%、「24時間以降入院中」18.8%、C群は「妊娠中」15.2%、「出産後分娩室で」54.4%、「帰室後24時間以内」18.9%、「24時間以降入院中」10.6%であった。「妊娠中」あるいは「出産後分娩室で」の早期を選んだ人が、A群58.8%、B群67.2%、C群69.6%であり、C群はA群より有意に増加していた($p < 0.05$)。

2) 母子同室の感想(良かったこと)

産後退院前の質問で、母子同室の良かったことを選んでもらった(表：質問5)。「赤ちゃんが一緒に安心できた」を選択した人はA群67.5%、B群74.2%、C群79.3%であり、C群はA群よりも有意に増加していた($p < 0.05$)。その他の項目では有意差は認められなかった。

3) 母子同室の感想(良くなかったこと)

産後退院前の質問で、母子同室の良くなかったことを選んでもらった(表：質問6)。「寝不足にな

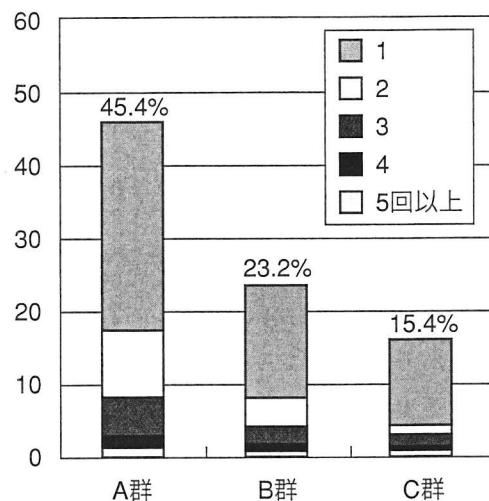


図 産褥0～4日に児を預けた回数

った」を選択した人はA群58.8%、B群52.8%、C群41.0%であり、C群はA群B群よりも有意に減少していた($p < 0.01$, $p < 0.05$)。

「再三泣いて困った」を選択した人はA群32.5%、B群26.6%、C群21.2%であり、C群はA群よりも有意に減少していた($p < 0.05$)。

「入院中くらはゆっくり休みたかった」を選択した人はA群11.4%、B群3.9%、C群6.9%であり、B群はA群よりも有意に減少していた($p < 0.05$)。

「赤ちゃんがいるため不安だった」を選択した人はA群4.4%、B群3.1%、C群1.8%であり、減少がうかがわれたが有意ではなかった。項目の「疲労が強かった」「世話の仕方が分からなかった」については有意差は認められなかった。

これら母子同室の良くなかったことの訴えも、産褥2日目前後に一時的に見られたのみで、退院前には大多数の母親は母乳分泌も良好となり、24時間の育児にも慣れ、児との生活に自信を持って退院を迎えている。

また、入院期間中を通して良くなかったこと「無」を選択した人はA群19.3%、B群25.0%、C群37.8%であり、C群はA群B群よりも有意に増加していた($p < 0.001$, $p < 0.02$)。

4) 産褥4日までに児を預けた回数(図)

分娩当日から産褥4日までの間に母親の希望で児を1回以上新生児室に預けたことのある人は、A群45.4%、B群23.2%、C群15.4%であり、B群

C群はA群よりも有意に減少しており($p < 0.001$), C群はB群よりも減少の傾向がみられた($p < 0.1$)。

5) 1カ月健診までの育児に対する感想

質問7の1カ月健診までの育児に対する感想(I)では、3群間に有意差を認めなかった。

6) 1カ月健診時の対児感情

質問8で「赤ちゃんは可愛く、育児は楽しかった」を選んだ人は、A群53.0%, B群51.9%, C群61.9%であり、C群はA群B群よりも多い傾向があった($p < 0.1$)。その他の項目では有意差は認められなかった。

7) 母乳率

退院時母乳率は、A群96.5%, B群97.4%, C群98.0%であり、有意差はみられなかった。

1カ月健診時母乳率は、A群61.6%, B群74.8%, C群86.9%であり、A群B群間、B群C群間にそれぞれ有意差がみられた($p < 0.02$, $p < 0.01$)。

3. 母性形成支援の検討のまとめ

分娩直後のカンガルーケアなどや、妊娠中からの2冊の本による母乳育児、および児の健やかな成長・喜び多い育児の観点から望まれる母性についての正しい知識の獲得によって、児に対する愛情も早期に育まれることが考えられた。

また、母子同室の感想の検討では、B群、C群の取り組みにより、同室で児と一緒に居ることを喜ぶ母親が増え、児との生活もよりスムーズになったことが分かる。その結果、入院中に児を新生児室に預ける母親が有意に減少している。

この、児に対する豊かな愛情、ストレスの少ない育児、および母乳育児についての正しい知識の獲得が、1カ月健診時母乳率の上昇につながっている。

III. 考 察

今回の検討は、退院時母乳率と「産褥4日まで児を預けた回数」以外は質問紙法あるいは母親の言によったため、その部分では客観性に欠けるとの批判もあるかも知れない。すなわち、回答者が自分の本当の感想などではなく、「望ましい」と考える回答を選んだ可能性も否定できない。しかし、その場合でも、回答者がB群、C群の取組

みにより「望ましい」母性や母乳育児についての知識を得て、各自の母性意識を高めたと言えないだろうか。

筆者の研究では⁷⁾、「分娩直後からの24時間母子同室」を取り入れることにより、退院後の1カ月健診までの育児に対する感想で、「順調で楽であった」「楽ではないが満足できた」と肯定的に答えた母親が有意に増加し、1カ月健診時母乳率も有意に増加した。また、児に母乳を与えるという体験が³⁾、対児感情の育成に多大な影響を及ぼすことも示されている⁸⁾。

本能行動が始まるためにはその行動を解き放つ刺激(条件)が必要であり、本能が有効に働くためには学習が必要である、と林は述べている。母性愛についても、出産という物理的事実によって機械的に愛情が現れるのではなく、愛情が感じられるようになるメカニズムが生得的に備わっているという意味において「本能」なのである。したがって、その生得的なメカニズムが壊されるようなことがあれば、母子の愛情は育たない⁹⁾。

今回検討した出産直後のカンガルーケアや2冊の本などは、そのような意味で、母子に負担をかけることなく、本能である母性の発現・発達に寄与したと考えられる。

文 献

- 1) 松尾恒子：母子関係の臨床心理。日本評論社、東京、pp23-25, 1996
- 2) 松尾恒子：母子関係の臨床心理。日本評論社、東京、pp93-95, 1996
- 3) 岡村博行：母性を育む。日本評論社、東京、pp186-191, 2002
- 4) 福永寿則、松下厚子、小川朋子、他：母乳育児推進の各種取り組み、および退院時母乳栄養率97.3%における入院中の人工乳追加状況。周産期医学 32(2)：249-253, 2002
- 5) 山内逸郎、橋本武夫、南部春生、他：母乳育児何でもQ&A。婦人生活社、東京、1994
- 6) 石田勝正：抱かれる子どもはよい子に育つ。PHP研究所、東京、1993
- 7) 福永寿則：完全母児同室制および母乳哺育への移行。周産期医学 26(5)：732-736, 1996
- 8) 花沢成一：母性心理学。医学書院、東京、pp78-79, 1992
- 9) 林 道義：母性の復権。中公新書、東京、pp62-75, 1999